九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

怪異本『宿直座頭』報告

花田, 富二夫
有明工業高専講師

https://doi.org/10.15017/16286

出版情報：文獻探究. 5, pp.15-21, 1979-12-05. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

怪異本『宿直座頭』報告

花田富二夫

内容

管見の一本は七巻十冊。正徳四甲午歳正月吉旦の刊記を持つ国立国会図書館蔵本である。書肆八尾勘兵衛、川勝五郎右ヱ門。京都。後者は升屋として江戸店あり。（注1）作者名不詳。序文有。跋無。説話総数131。巻一（1～10）巻二（1～21）巻三（1～26）巻四（1～18）巻五（1～18）巻六（1～14）巻七（1～24）。第1冊（巻一）第2冊（巻二1～10）第3冊（同巻11～21）第4冊（巻三1～17）第5冊（同巻18～26）第6冊（巻四1～18）第7冊（巻五1～18）第8冊（巻六1～14）第9冊（巻七1～10）第10冊（同巻11～24）。絵入。

序文を見ると既に出典のヒントを与えている。全文ではないが、

ふるき代のおそろしきおかしき或は心の杖を物のふの八十うぢ山にたどらせ落椎の実のある武勇のほまれをかたり古今著聞の壁に耳つけては直なる神や佛の有難キ方便をはなし

と、神佛から武勇に至るまで、おそろしきおかしき話を集めたものとする。特に古今著聞という語句より『古今著聞集』を想起できよう。『古今著聞集』や『宇治拾遺物語』などは説話の宝庫として江戸作家達にもよく読まれていたようだ。だが、本作品を検討してみると、ことごとくこの両書からの抜粋であることが分った。次に示すようにその全てを両書に指摘できる。この点に関して今迄述べられたものを見ないのでここに紹介してみたい。ちなみに佐村八郎氏の『増訂國書解題』等には、

宿直座頭　七巻

俗佛説などにちなみたる可笑しき作品を摘録したるもの。凡百十七條あり。〃

と記載されるだけである。

（　）は説話番号

〈巻一〉『宿直座頭』	内容
一　上総守時重日吉の神感に預る事	古今著聞集　巻一（七）
二　水無瀬山の池人とりの夏	古今著聞集　巻十七（六〇三）
三　哥の徳により風波の難をのがれし事	古今著聞集　巻五（一六五）
四　陽成院ばけものの事	宇治拾遺物語（一五八）
五　廣貴つまの訴えにより閻魔王宮へめさるゝ夏	宇治拾遺物語（八三）
六　ぬすひと（ひりき）臀纂を感ずる事	古今著聞集　巻十二（四二九）
七　武徳院ばけものゝ事	古今著聞集　巻廿七（五八九）
八　修行者百鬼夜行にあふ夏	宇治拾遺物語（一七）
九　三河といふ童發心の事（注2）	古今著聞集　巻八（三二三）
十　法花経聴聞する狼の事	古今著聞集　巻二十（六八〇）
〈巻二〉	
一　観音経蛇と化して人をたすけ	宇治拾遺物語

給ふ事

二　鬼同丸源の頼光をねらふ事　（八七）　古今著聞集　巻九（三三五）

三　山門横川賀能地蔵の夏　宇治拾遺物語（八二）

四　佐伯氏長強力の女にあふ夏　古今著聞集（注3）巻十五（三七七）

五　猟師仏を射る事　宇治拾遺物語（一〇四）

六　清明蛙をころす事　宇治拾遺物語（一二七）

七　北野の天神竜と化し給ふ事　古今著聞集　巻二（四五）

八　徳大寺殿の人夫熊野権現の御あハれみをかうふる事　古今著聞集　巻一（一九）

九　明衡わざほひにあほんとする事　宇治拾遺物語（二九）

十　業師堂のくちなはの事　古今著聞集　巻二十（六九五）

十一　出家功徳の事　宇治拾遺物語（一三六）

十二　空也上人小児をとふらひ給ふ事　古今著聞集　巻十三（四五四）

十三　大井光遠が妹ちからつよき事　宇治拾遺物語（一六六）

十四　養老の瀧の事（注4）　古今著聞集　巻八（五二五）

十五　しのみや河原のぢざうの事　宇治拾遺物語（七〇）

十六　小侍従ざんげ物がたりの夏　古今著聞集　巻八（三二二）

十七　慈覚大師頼縝城に入給ふ事（注5）　宇治拾遺物語

十八　永観律師往生の事　（一七〇）　古今著聞集　巻二（五一）

十九　石橋の下のくちなはの事　宇治拾遺物語（五七）

二十　志貴の昆沙門家隆卿の哥を吟じ給ふ事　古今著聞集　巻五（二一八）

廿一　相應和尚とそつ天にのぼる事付そめどのゝ石祈り奉る事　宇治拾遺物語（一九三）

〈巻三〉

一　頼朝卿天王寺詣付善光寺如来　古今著聞集　巻二（六二）

二　印相の御物語の事　古今著聞集　巻二十（七〇一）

三　江州たかしま郡の牛経をよむ事　古今著聞集　巻二十（七一一）

四　民部丞が家の犬精進の夏（注6）　古今著聞集　巻二十（六九七）

五　鵄猿の目をぬかんとする事　古今著聞集　巻二十（七一八）

六　くまたかくちなはをとる事　古今著聞集　巻二十（六八一）

七　朱雀大路にて美女にあふ事　古今著聞集　巻二十（六九九）

八　湯をかけて蛇をころす事　古今著聞集　巻二十（六八二）

九　久世郡の女蛇の難にあふ事　古今著聞集　巻二十（六九八）

十　法のために馬をぬすむ猿の夏　古今著聞集　巻二十（七一九）

十一　知願上人の乳母馬になる事　古今著聞集　巻二十（七一一）

十二　能因法師哥にて雨をふらす事　古今著聞集　巻五（一七一）

十二　きた野の天神に祈りて無実の難をはるゝ事（注7）　古今著聞集　巻五（一七七）
十三　嵯峨の天皇と弘法大師御手跡あらそひの事　古今著聞集　巻七（二八六）
十四　母のために魚とる法師の事　古今著聞集　巻八（三一二）
十五　浮戒の尼をおかす事（注8）　古今著聞集　巻八（三二九）
十六　従二位家隆往生の事　古今著聞集　巻十三（四六九）
十七　八幡太郎義家法師の妻と密通の事　古今著聞集　巻九（三三九）
十八　武者所むつるみさごを射る事　古今著聞集　巻九（三四八）
十九　義家進房卿に物ならふ事　古今著聞集　巻九（三三七）
二十　平太経家悪馬にのる事（注9）　古今著聞集　巻十（三六四）
廿一　腹くじりといふ相撲とりの事　古今著聞集　巻十（三七九）
廿二　千手院廣清が墓に霊魂経をよむ事（注10）　古今著聞集　巻十五（四八四）
廿三　ある雲客嵯峨にて面目うしなふ事　古今著聞集　巻十六（五六六）
廿四　僧上観修あべの清明等さどくの事　古今著聞集　巻七（二九五）
廿五　赤染衛門子の病によりて住吉明神を祈事（注11）　古今著聞集　巻八（三〇二）
廿六　後嵯峨院白河の少将のつまに御心をかけさせ給ふ事　古今著聞集　巻八（三三一）

〈巻四〉

一　春日大明神衆徒の軍に御加勢の事　古今著聞集　巻一（一八）
二　俊乗坊大神官参籠の事　古今著聞集　巻一（二六）
三　江帥筑紫より上洛の時たからつみたるふね海にしづみし事　古今著聞集　巻三（八二）
四　疫神秀句を責む事（注12）　古今著聞集　巻四（一一七）
五　三位入道行能夫人の告にて額書夏　古今著聞集　巻七（二九一）
六　賭弓の日右近の馬場にて武則公助を打擲する事　古今著聞集　巻八（三一三）
七　龍尾道に大蛇おちかゝる事　古今著聞集　巻十七（五八〇）
八　氷にて塔をつくる事　古今著聞集　巻十七（五八二）
九　疱の神水をのむ事　古今著聞集　巻十七（五九六）
十　伊豆国奥の嶋へ鬼さたる事（注13）　古今著聞集　巻十七（五九九）
十一　近江守仲兼ばけ物にあふ事　古今著聞集　巻十七（六〇一）
十二　天狗法師唯蓮房をさまたくる事　古今著聞集　巻十七（六〇四）
十三　からねこしな玉をとる事　古今著聞集　巻十七（六〇九）
十四　経頼くちなはにあふ事　宇治拾遺物語（一七七）
十五　新羅国の石金榻の事　宇治拾遺物語（一七九）
十六　貪俗仏性を観じて富る事　宇治拾遺物語（一五四）
十七　内記上人法師陰陽師の紙冠を　宇治拾遺物語

	破る夏	（一四〇）
十八	宗行郎等虎を射る事	宇治拾遺物語（一五五）
	〈巻五〉	
一	出雲寺の別当の鮓になりたるをしりながら殺してくふ事	宇治拾遺物語（一六八）
二	浮蔵が八坂の坊に強盗入事	宇治拾遺物語（一一七）
三	河原院に融公の霊すむ事	宇治拾遺物語（一五一）
四	金峯山の金を箔にうちたる事	宇治拾遺物語（二二）
五	袴たれといふ盗人保昌にあふ事	宇治拾遺物語（二八）
六	唐人聴法の場にて秀句の事	古今著聞集 巻五（一五三）
七	帝の御哥に定家卿合点の事（注14）	古今著聞集 巻五（二一七）
八	絵にかきたる馬田をあらす事	古今著聞集 巻十一（三八五）
九	性空上人の形を絵にうつすとき地震の事	古今著聞集 巻十一（三八六）
十	やすふし舟をいのりかへす事	宇治拾遺物語（三六）
十一	多田満仲の郎等発心の事	宇治拾遺物語（四四）
十二	水無瀬とのゝ鼈の事	宇治拾遺物語（一五九）
十三	長門前司の女葬送の時本所にかへる事（注15）	宇治拾遺物語（四七）
十四	易のうらなひして金とり出す事	宇治拾遺物語（八）

十五	五穀をたつ聖いつはりあらはるゝ夏	宇治拾遺物語（一四五）
十六	一条の桟敷屋鳥の事	宇治拾遺物語（一六〇）
十七	龍門のひじり鹿の命にかはらんとする事	宇治拾遺物語（七）
十八	清水寺に二千度参詣の者双六にうちいるゝ事	宇治拾遺物語（八六）
	〈巻六〉	
一	式部太補実重賀茂明神の御正躰拝見の事	宇治拾遺物語（六四）
二	提婆菩薩龍樹ぼさつの許に参給ふ事	宇治拾遺物語（一三八）
三	晴明をこゝろみる僧の事	宇治拾遺物語（一二六）
四	僧正行尊の事	古今著聞集 巻二（五二）
五	鄭太尉が事	宇治拾遺物語（一五三）
六	永超僧都魚を喰事	宇治拾遺物語（六七）
七	増賀上人三条の宮にまいる事	宇治拾遺物語（一四三）
八	慈恵僧正煎豆はさみ給ふ事	宇治拾遺物語（六九）
九	せいめい蔵人少将を封ずる事	宇治拾遺物語（二六）
十	静観僧正雨を祈る法験の夏	宇治拾遺物語（二〇）
十一	同増正大嶽の岩をいのる事	宇治拾遺物語（二一）
十二	良忍上人融通念仏の事	古今著聞集

十三	少将のひじり往生の事	巻二	（五三）
		古今著聞集	
		巻二	（五四）
		宇治拾遺物語	
			（一六）
十四	尼地蔵を見たてまつる事		
	〈巻七〉		
一	行基菩薩湯の山の業師如来にあひたまふ事	古今著聞集	
		巻二	（三七）
二	閻魔王宮におひて十万部法華経よみたまふ事	古今著聞集	
		巻二	（五六）
三	蓮花王院に八功徳水わく事	古今著聞集	
		巻二	（五八）
四	聖寛法印一念多念の沙汰の事	古今著聞集	
		巻二	（六六）
五	長谷の観音夢に寶珠を給はる事	古今著聞集	
		巻二	（六七）
六	観音悪風にあふ舟をたすけ給ふ夏	古今著聞集	
		巻二	（七〇）
七	康忠犬に生るゝ事	古今著聞集	
		巻二十	（六八九）
八	范久阿闍梨西方を後にせざる事	宇治拾遺物語	
			（七三）
九	賀茂明神雅経の寄をめで給ふ夏	古今著聞集	
		巻一	（三二）
十	紙東大寺の仏を礼拝する事	古今著聞集	
		巻二十	（六七六）
十一	御物の鷹を十禅寺の辻につなぐ事	古今著聞集	
		巻二	（六七八）
十二	小式部内侍命終のとき寄よむ事	古今著聞集	
		巻五	（一七五）
十三	人に無實といひかけゝる女房物に狂事	古今著聞集	
		巻五	（一八七）
十四	小野小町町ヵ事	古今著聞集	
		巻五	（一八二）
十五	當麻の曼陀羅の事	古今著聞集	
		巻二	（三六）
十六	盲目なる人前生魚にてありし夏	古今著聞集	
		巻一	（二七）
十七	聖寶僧正鬼にあふ事	古今著聞集	
		巻二	（四一）
十八	大般若書写の人を鬼人守護の事	古今著聞集	
		巻二	（六八）
十九	書写の上人のもとへ冥途より使たつ夏	古今著聞集	
		巻二	（七二）
二十	内裏女房ぬすびとの事	古今著聞集	
		巻十二	（四三三）
廿一	後鳥羽院御勇力の事	古今著聞集	
		巻十二	（四三六）
廿二	灰を食て飢をやむる事	古今著聞集	
		巻十二	（四四〇）
廿三	安養の尼のもとへぬす人いる事	古今著聞集	
		巻十二	（四四六）
廿四	清瀧川の聖の事	宇治拾遺物語	
			（一七三）

※説話番号は岩波日本古典文学大系による。

以上の通り総計131話中、84話を『古今著聞集』より、47話を『宇治拾遺物語』より抜粋した事が知れる。前半部では『古今著聞集』と『宇治拾遺物語』が交互に現われるが、後半では夫々がグループとなって立ちかわっている。その他の細かい点については注に記した。

付記

『宿直座頭』に関して『国書総目録』は浮世草子と類別し

てある。長谷川強氏は『浮世草子年表』に於いて削除せられている。(注16) 蓋し長谷川氏の御指摘の通り、本作品は小説と呼ぶには程遠い作品である。一応怪異本と冠したものの、最初何と呼んで良いか適当な名前が見当らなかったためである。従って、怪異小説とはしながらも純然たる小説とは異なることを言っておかねばならない。

近世の怪異小説に大略三つの傾向を認めることは異存がないであろう。『とのゐ草』の民話的怪異小説、『因果物語』の仏教的怪異小説、『伽婢子』の翻案怪異小説の三つとして野田氏は典型化されている。(注17) 一方で中国文学に素材の開拓を図りながらも、一方では在来の日本説話文学にその素材を追い求めている。新渡来の中国文学に目を奪われながらも説話の宝庫たる『今昔物語集』を始め、本稿で述べた二書等にある話の面白さを捨ることはできなかった。西鶴も読んでいるし(注18)、後続の青木鷺水等も読んでいる。(注19) 本書はこれら江湖の読書人達の好みを反映しているとも言えよう。それがこのような形となって発刊されたものと思われる。日夏耿之介氏は『徳川怪異談の系譜』の中で『大和怪異記』以下十数書の中に本作品を取り入れ、「過半は愚書で讀むに耐へない。」と述べていられる。(注20) 愚書と言えばそれまでであるが、そうやって切り捨てる前に、私は本作品に今述べた近世人の我が国説話文学への傾倒の気分を看取したいのである。ひと口に怪異小説と言っても、元禄も終わりから正徳期にはいると浮世草子の影響が少しずつ変質を見せている。『宿直座頭』の発刊前年の正徳三年刊『和漢乗合船』(注21)(外題『怪談乗合船』)には、それまでの中国志怪書の翻案の外に、巻五「二子心中」の話のように仇討談がはいり込んできている。この傾向は既に正徳二年刊の『一夜船』にも見られている。謂わば怪異談的要素の中に武家談的要素が混入してくるのである。(この武家談的要素は既に天和三年刊の『新御伽婢子』に萌していよう。)これは後の享保二年刊『怪醜夜光珠』(注22)に続くと仇討談(巻一の三、巻二の七、巻四の十三、巻五の二十)と定着してくるのであり、他に、詐偽談(巻三の十二)等の性質の混入も見られるのである。

この近世も中期になんなんとする小説界の変革期に当たって『古今著聞集』や『宇治拾遺物語』によって一書を構えた版元や作者の怪異に対する認識は厳然として在来の説話文学にも土壌を有していた事を象徴するのではなかろうか。その一証左として貴重な紙面をつぶさせて頂いた。

(注)

1 『徳川時代出版者出版物集覧』(矢島玄亮著)より

2 岩波大系では「千手」とあるのを本作品では「ちとせ」と読んでいる。

3 『著聞集』ではこの項「佐伯氏長強力の女大丹子に遇ふ事并びに大井子水論して力を顕す事」の二話が載るが、本作品では前半部のみ記載する。

4 「つぶしにまろびたり(けるにミミミミ養老の瀧と名)つけられにけり」の()の部分省略ありて文脈不明なり。

5 文章の省略あり。

6 この項『著聞集』の題名は「五代氏部巫が飼犬魚鳥を喰はざる事并びに平行政が飼犬断食の事」であり、後半の題名が本作品にないが内容の記述有り。

7 この項省略あり。「うせたり(……とりてまいる)ほど。に」文脈通ぜず。

8 この項落丁(23丁目)あり。前話(十四話)が途中で切れ、当本文も途中より始まる。理由は不明だが、話の内容と関係があるのかどうか。尼を犯す話である。他本は木見につき後考を俟つ。

9 文末に少し省略あり。

10 注3同様前半部のみ記載。

11 本項は巻五(一七六)にも同内容の抄出文が重出するが、巻八の当項にも依拠している。

12 本項、次の辞句が追加されている。「私云右乃句ハ清慎公左大将を辞し給ひける時の辞状。文時の作にて朗詠集

にも入て侍り下ノ句ハ穎水浪閑祭征虜之末社と侍る」。詩句の説明である。

13 文末に省略あり。

14 注3同様前半部のみ記載。

15 注12同様追加文あり。「私日これ高辻室町の西にまします婆梨の宮の因縁なるべし。彼町には繁昌と申侍るはいかなる故ならん覚束なし。けふ八九月廿日也。むかしは七月廿日におこなひけるとそ」。これは『拾遺都名所図絵』巻一に載る「元はん女社」についての記述であろう。『拾遺都名所図絵』には「高辻通室町の西、北側人家の奥にあり。古此地にはん女の塚あり。今小祠を営み、鳥居を立て、額『半女社』と書す。……」として『宇治拾遺物語』のこの部分を記載している。

16『浮世草子の研究』巻末年表。

17「怪異小説の展開」

18 後藤丹治氏「古今著聞集」と西鶴の説話」（『西鶴研究』第二冊）

19 長谷川強氏『浮世草子の研究』二六七頁

20『日本文学講座Ⅲ近世の文学』（河出書房版）

21 正徳三年刊国立国会図書館蔵

22『徳川文芸類聚四』

――有明工業高専講師――

会員

一望雄子至文夫豊一二子子照廣典夫子準浩勉

順正暢弘良敬憲潤順良義俊富二迪

川野島部口村石田橋坂中條田口田田井野県田

稲小辛木坂崎白園高田田中楢野花花福矢山和